学術集会報告

【シンポジウム／家庭医のやりがい】
家庭医のやりがい　座長の場所から

竹村洋典*1　藤沼康樹*2

*1　三重大学医学部附属病院総合診療部・准教授　日本家庭医療学会・副代表理事

*2　日生協医療部会家庭医療学開発センター　センター長

時として家庭医が観念的で理想的な医師と捉えられることもります．学会から，後期研修プログラムのアウトカムとして家庭医像が示されましたが，文章ではその実像が浮かび上がらないかもしれません．今回のシンポジウムでは，いろいろなセッティングで活躍されている家庭医の先生がたにその活動内容をご発表いただいたことで，かなり現実的で実際的な医師たちであることが聴衆の皆様にご理解いただいたのではないかと思いました．ベテランの先生にとっては「私のやっていることと同じ」と感じられたかもしれません．また，その診療の違いに気が付いたかもしれません．学生や研修医の皆様にとっては教育や研修のゴールが見えたかもしれません．直接，家庭医療に関係していない皆様にはその魅了が認知されたかもしれません．

私自身は，「患者中心」のキーワードのもとに，多種多様な環境において家庭医療は実行可能，と考えています．このシンポジウムは，「家庭医療をやっている人たちはオタッキー」とか「家庭医療は限られた医療施設のみ可能」といったご意見に対する答えとなったのではないのでしょうか．このシンポジウムで家庭医療の裾野の広さを学会として示すことができたのではないでしょうか．今後，日本家庭医療学会はさまざまな自己変革を実施することと思われますが，それが決して間口を狭めるものではない，しかも家庭医療の理念を失うものではないことが垣間見られたとも思われました．この意味で，このシンポジウムは日本家庭医療学会の歴史においてランドマークとなる意義深いものとも思われました．